

274

特 249

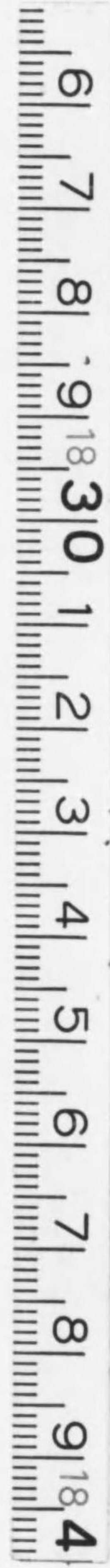
19

日本に残されたる

此の一道

皇國日興會

38



始



特249
19

國土奉戴のため、

富士に祭壇を設けて

天壤無窮の御神勅の

實現を期す



日興會同人

日本史觀に立つ信念

獨伊の兩國は何のために現れたか？

今や、獨伊の兩國は、古き國際正義の情力を、ふり切つて、敢然として新たなる歴史的正義のために起ち始めた。

歴史は正義を欲する。歴史は決して單なる平和等は求めない。眞の平和は眞の正義の上のみ生れる。歴史はそれを實證して行かうとしてゐるのである。さればこそ、イタリーを現しドイツを起し、そして日本を生まうとしてゐるのである。

日本が最後に現れ、日本から最後の正義が現れる。それが「歴史」である。従つて歴史の最後の段階に起つときの日本ほど、大きな生みの苦みを經驗するものは無く、而かも日本は

既にその陣痛期に入つた。日本は如何に覺悟し、日本は如何に起たねばならぬか。

精神文明にしても、物質文明にしても、日本は今まで、一貫して、受けて成長し、發展して來たのである。而して此の「受けて起つ」といふところに、日本の日本たるところがあるのであつて、過去の日本史はそれを證明し、更に現在の日本は、一層大きなものを受けて起たねばならぬやう運命づけられてゐるのである。

惟ふに、地は天の力を受けて立ち、草木は地の力を受けて立つてゐればこそ、偉大な弾力を示してゐるのであらう。そのやうに、人間も亦、天の力、地の力、草木の力の一切を受けて立つときのみ、人間特異の自然力を現し得るのである。

ところが、實際のところ、人間は「三千を受けて」立つてゐるだらうか。

否々、天の心を、地の心をその儘に受けて立つてゐる、當の日本國の人々に於て、此の事が自覺されてゐるだらうか？寧ろ今までは反對に、「自見を以て正義とする」道を歩みつけて來たではないか？

それだから、さういふ道の世界は破壊され初めたのだ。さうして日本國を受けて起たせや

うとする無言の聲が澎湃として聞え初めたのである。

天地の心を受けて立つ國には、天地の心を受けて起つ人間があつてこそ、始めてその國に相應しい道の力を發揮し得るのである。彌勒菩薩が瑜珈論に「東方に小國あり、その中に唯大乘の種姓のみあり」と云つたのは此の事である。

日本そのものが、既に天の心を受け、地の心を受けて、悠遠の昔に生れてゐたのだ。日本人が「三千を受けて起つ」事を忘れてゐて無事でゐやう筈がない。歴史はそれを自覺せしめやうとして來たのであり、そして、そのためにイタリアは奮起し、ドイツは萬難を排して現れた。

今や日本は、そのイタリアによつて新しい歴史的正義を見せつけられ、ドイツによつて更に烈しく見せつけられ、そして遂に、それらの國々と結ぶに至つて、いよいよ日本からも亦新たなる歴史的正義を創造して起たねばならぬ事を知らしめられるに至つたのである。

斯くて考ふれば、今次の戦ひが一つの思想戦とは云ふものゝ、それはまだ本格的な思想戦の舞臺を展開したものはなく、たとい背後に共産主義の手等が見えても、それらとの對戦

は、既に古きものに屬する。

日本が眞に覺悟して起たねばならぬ、本當の思想戰の舞臺は、此の新しい正義を欲して現れた獨伊の兩國に對して、如何に答へ、如何に彼等の正義以上のものを、日本からも亦創造して起たねばならぬかといふ一點にある。獨伊の兩國は、最早單なる日本の味方として現れた國ではない。彼等は眞に正しきを欲する盟邦として登場して來たのであり、従つて日本からも、より正しき歴史的正義の發現を望んでこそ現れて來たのである。

従つて其處には、利害打算を越えた崇高なる歴史的な念願が踊つて居り、民族の血を、歴史的正義の前に捧げんとするほどの驚歎すべきものさへ有つてゐる。

さういふ獨伊の兩國が、日本の盟邦として現れて來たのである。日本はたゞ歡喜してゐるだけですまされるだらうか。

若しも「防共の目的」だけで結ばれた國等と考へてゐるものがあるならば、それは怖ろしい誤りである。「防共」とは歴史の與へた一つの機會に過ぎない。歴史は防共精神以上のものを求めてゐる。共產主義を生ぜしめたものも歴史であるのに、その共產主義を生ぜしめて置

いて、單にそれを防がしめる。——歴史とはそんな詰まらぬものではあるまい。

斯くして日本もいよく、これらの盟邦に答ふるに、日本的正義の強力なる發動を以てせねばならなくなつて來た。即ち新たな歴史的正義を創造して行かんとする獨伊の「全體主義」の波がいよく日本といふ「最後に受けて起つ國」を目がけて押し寄せつ來たと見るのが至當である。

日本は如何に受けて起たねばならぬか？日本は如何にその波を潜つて現れねばならぬか？日本は如何なる全體主義を展開して現れねばならぬか？問題は實に茲にある。日本は再び觀られなくてはならない。

日本は如何に、再び觀られねばならぬか。

全日本人が知つてゐながら、不思議にも亦、揃ひも揃つて忘れ果してゐる事が一つある。

それは、日本が、最高の御女性を、皇祖に戴いてゐたといふ事だ。驚くべき此の一事よ！日本は皇祖に還元して、再び觀られなければならない。

凡そ、世界に、最高の、たゞ一人の、御女性を、その國の祖先に現してゐたやうな國が何處にあらう。而かもそれは斷じて一片の「神話」といふやうなものではなく、現實に立派にお生れ遊ばした大日靈尊といふ御女性であり、その御女性に感應して始めて、女神の天照皇太神はお現れになつたのである。

日本は斯くの如く、徹頭徹尾、始めから、女神を現して、その立國の基礎精神を、誰の目にもわかるやうに、然り全人類の眼にも判るやうに露してゐたのである。のみならず萬世一系の天皇は、一貫してその女神の御精神を受けて天皇となられてゐるのであり、その女神の大精神を以て、國家御經綸の、人民愛撫の根本精神としてゐたまふのではないか。

然るに、國民が此の事にぼんやりしてゐるとは、何事であらう。否學者が、政府が、それを識らずにゐるとは何事であらう。此の一大事に氣づかざる間は、日本にあるものは、何一つとして活かされる筈はなく、寧ろ反對に、日本を覆ひ、日本を苦め、日本を暗くする爲めのみを反作用を演ずるやうになるのは當然である。例へば、女神の一大精神で治めべき國を男の精神で治めたとしたら如何、如何に日本が苦んでゐるか、如何に天照皇太神様が苦まれ

てゐ給ふてゐるかは想像の外である。従つてその反映は、當然にまた畏れ多くも大君の上に現れて、國民に知れない陛下のお立場の上における御苦惱となり、當然にまたそれが國民全體の上に現れて、遁れ場のない。八方塞りの異常な苦の現實を経験せしめられてゐるのである。日本は再び觀られなければならない。皇祖に還元して再び觀られなければならない。

仰げば、太陽は、光を生んで無言の間に自らの女王たる事を語つて居り、地また萬物を生んで、自ら、その太陽系宇宙の中における、更に一段と勝つた大女王たる事を、語つてゐたではないか！ 寔に無言ほど驚歎すべき雄辯はない。眞の學問は、かくて學問の外に在り、眞の大宗教は、かくて宗教の外に赫灼として在る事が知れる。

日本が皇祖に女神を載いて來た事も、その如くまた無言である。さればこそ、今までに取り上げた人もない。取り上げた人がないだけ、それだけ、此の一大事實の前には、百の異論も用をなさぬ。日本とは斯くの如く前代未聞の一大女王界だったのである。若し之れを疑ふ者があるならば、太陽を見て太陽を疑ひ、大地を見て大地を疑ふものである。

然るに、その一大女王界は、無暴にも、當の日本人の思想によつて今まで男装せしめられ

て來たのである。雲は月をかくし、愚者は聖者をかくす。眞の日本は、まだ世界には現れてゐなかつたのだ。

驚くべし「皇」とは、その一大女王國の絶大なる運動精神に外ならなかつたのである。

一大女王國なるが故に、一切のものを受けて起つといふ最後の位地に置かれてゐたのである。最後の正義を發動して起たねばならぬ様約束づけられてゐたのである。

イタリーは、ドイツは、その爲めに迫つて來たのであり、迫つて來て此の一大女王國の扉を叩き初めたのである。

私は此の事を書き顯した印刷物に、而かも手紙を添へ十數人の有名な思想家諸君、宗教家諸君に對して送つたのであるが、何等の返答にも接しなかつた。私は驚きやら、恐怖やら悲みやらを一時に感じた。日本人が日本を忘れてゐる事が、かくも習慣的に、性格的とまでなつてゐたかを知つて、これはたゞ事ではない。と考へた。矢張り召集令状を受け取つて、家を捨て、妻子を棄て、一切の行きがりを捨て、戰場に出陣せしめられるやうな場合が來ないと、その習性から脱け切らないのか——といふ事をしみじみと感ぜしめられたのである。

寔に、親が子の爲めに盲目になり易いやうに、學者も亦學問のために、宗教家も亦宗教の爲めに、思想家も亦思想の爲めに、盲目になり易い——といふ事の活きた鏡だ。怖ろしい事は、自己の専門としてゐる職務を、天地の前に投げ出して、天地の眼によつて更に正しく見直して貰はふとする敬虔な、大魂魄を持ち合はしむない事だ。如何にそのために、國家を誤る惡因縁の種子を蒔き散らしつゝある事か。「破國の因縁を説く」即ち是れである。

日本そのもの

日本人は一人残らず、日本あつての日本人である。日本そのものが、思想の、宗教の、精神の、本尊であり、根源であり、本體でなくてはならぬ、此の事實は夜中の満月よりも明かであり、白晝の太陽よりも直射的である。

心頭の雲晴れて見れば、日本とは、太陽が光の母なるが如く、地が萬物の母なるが如く、實に人類の理想的精神の母だつたのである。母なればこそ、あの天壤無窮の御神勅が、前代

にも後代にも無いと一人の御女性の口から發せられてゐたのであり、そしてその母たる事を知らしめる爲めに、女神の天照皇太神の御示現となつてゐたのである。

歴史とは、斯くて、日本といふ一大女王國の出現を目指して進んでゐるのであり、天照皇太神様はその御實體を露す時を目がけて進んでゐたのである。天壤無窮の御神勅が、偉大な御女性によつて發せられた時は、その相を現した時であり、爾來一貫して天皇を戴いて、受身的に發展して來た事は、その性を現してゐたのであり、そして、明治維新において復古しつゞいて昭和維新の大復古を通して、將に一大女王國を出現せしめんとする我等の運動において、體の開顯が始まらうとしてゐるのである。「邪眼の者は疑ふであらう、力及ぶべからず」。かくて初めに、女神の精神を以て先づ現し、中に一貫した受身的活躍を以て現し、終りに女神の本體を現し、以て始中終を貫いて、完全に日本といふ一大女王國の世界を現して行かうと意志して來たのが、本體史とも云ふべきものゝ真相であり、謂ゆる「神代因縁史」といふものゝ大實相だつたのである。

全日本人は此の大歴史を識らなくてはならぬ。なぜならば、此の大歴史こそ、正しく世界

史を包含した大日本史観であるからである。それは全人類を本源の神代に還らしめ、還らしめて火の神の在す日本國土に大復歸せしめんとする、その稀有の皇のはたらきを、はたらきつゝある、全體主義的な大歴史、大實相史であるからである。

第一の神代史は、イザナギ、イザナミ兩命の「國生み、火の神生み」で終つた。終つたが故に、その「國土」その「火の神」とは如何なるものであるかといふ事を明かにするために第二の神代史は展開されたのである。

されば見よ、第二の神代史の源頭において、天照大神、月讀命、素盞鳴命の御出現となるや否や、俄然、先づ、素盞鳴命を通して、「母の國を戀ひし」といふ大感情の發露となつたではないか。

「母の國」とは、火の神の在す國土の事であり、「日本」といふ事である。日本の「日」の字は「火の神」といふ事であり、日本の「本」の字は「國土」といふ事である。即ち「日本」とは「火の神の在す國土」といふ事であつて、第一の神代史の血肉に外ならぬ。

然らば何故に、その第一の神代史の血肉たる國土を「海の水が乾いて、了ふほど泣いて、戀

いしが、れた、素盞鳴命に對して、父神も、姉神も、無理解であり、その上、怒つて、父神は素盞鳴命を追ひ給ひ、姉神は素盞鳴命を疑はれたのであるか？是れ、全く、容易ならぬ問題である。

第二の神代史が、此のやうな大問題を、その源頭において既に見せてゐるに拘はらず、當の日本人が茲に一重の重大なる關心を有たずにあるとは、一體何うした事であらう。それで祖先に對して忠なる者と云へやうか、それで國體の明徴が理想的に行はれるであらうか。「日本戀ひし」の偉大なる涙で始まづた因縁史を、夢の國の話でも聞くやうな、輕卒な態度で聞き流してゐるとは、何うしても正氣の沙汰とは受け取れるものでない。

芝居や小説に流す涙はあつても、此の三千世界の涙を集めた神代史に泣く日本人はないのか？本が明かにならねば末は明かにならぬ、國體の明徴を期せんとせば、先づ本を明かにせよ！本を明かにせんとせば、第二の神代史の源頭に還れ！還つて此の大問題を解決せよ。

父神は何故に怒り給ふたか。天照太神は何故に疑ひ給ふたか？寧ろ歡び給ふこそ本當ではないか？偉大なる素朴から起つた事件ほど、偉大なる精神的要素を含んでゐるものはないのである。

である。

事件の真相

然らば何故に、此の大事事件は起つたか？その偉大なる精神的要素とは何であるか？

惟ふに、それは、素盞鳴命をして、一層「母の國」たる日本を戀ひさせ、一層「母の國」たる日本を探究せしめ、以て一層完全に、一層根本的に、天照皇太神の在す國土、即ち「母の國」を明かにせしめ給はんがために外ならなかつたのである。

國土を生み、火の神を生み給ふて、第一の神代史に終りあらしめてゐるほどの、そのイザナギ、イザナミの兩命の間に、迷ひが、あらう筈はない。それを「火の神を生みませるに因りて神避りました」イザナミの命を戀しく思召して、「黄泉の國に遭ひに行かれ」たり、そして「汚れたものを見た」等と迷はれてゐるのは、實は全人類の凡情を映し出して、見せてゐるのであり、映し出して見せて、然るが故に、吾れに見做ふな！吾れを見ずして國土を見よ、火の神を見よ！吾れ及び吾が汝妹のイザナミノ命はその國土と火の神とを生んで、既に大日本

を明かにしてゐるではないか！然るに國民は、人類は、吾が生んだ國土に歸り、火の神に歸る事を忘れて、たゞ目前の、小さな慾望の迷ひを重ねるであらう。感覺的な喜怒哀樂のみにその生命を捨て、了ふであらう。吾れはそれを知るが故に、先づ吾が身の上に、汝等の迷ひを映して、汝等の前に見せ、以て汝等をして迷はしめず、眞つすぐに、火の神の在す國土に還らしめんがために、此の一見、矛盾と思はれる因縁史を展開するのである。故に吾れを見て吾れに見做ふ勿れ、たゞ一心に國土を見よ、國土は火の神の在す國であり、汝等の母の國である。汝等全人類の本當の故郷である。國土に還れ、國土に還れ——といふ事を無言で叫びつゞけられてゐたのである。

それだから見よ！その眞の大説法を、一層明かに全人類に聽かしめんとして、第二の神代史に移るや否や、忽ち素盞鳴命をして、「母の國戀ひし」即ち「火の神の在す國土世界戀ひし」の大志望を發させたのである。

人類は所詮「國土世界に還る」ための道を歩みつゝあるのである。國土は天照皇太神、即ち「火の神」の在す世界である。故に無量の寶を包蔵してゐるのであり、無窮に亘つて清新

潑刺たる草や、木を生んで、人類の生命を一層高度に、一層潑刺として、火の神の如く活躍せしめるために、不斷に大精進してゐたまふのである。即ち一木、一草と雖も、天照皇太神の愛しき御子であり、天照皇太神はこれらの御子を總動員して、人類よ、草木の如く國土に還つて、一致協力して、我が生命を生きよ！我れはそのために、先づ天之御中主神となつて現れ、火の神となつて現れ、日本天皇となつて現れてゐるのである。我れに従はんとならば國土に還れ！國土は我が宮であり、我が身體である。たとひ我れを信ずるとも、國土に還らずば、我れは汝等を救ふ事を得ず。「今、此の三界は我が有なり、その中の衆生は悉く我が子なり、唯我れ一人のみ、能く救護をなす」と今も猶叫びつゞけられてゐるのである。

大懺悔して、自己のために第二の神代史が展開されてゐた事を識らねばならぬ。そして第一の神代史に大復歸せねばならぬ。即ち天照皇太神の在す國土に大復歸せねばならぬ。

見よ、國生みの太祖は、先づ國土を生んで、然る後に火の神を生み給ふてゐるではないか！「本因」先づ現れて、次ぎに「本果」がその中から現れる證據だ。「本因本果の大皇道」即ちこれである。

更にまた見よ！大國主命の國土奉還が先づ行はれて、そして始めて天孫の御降臨となつたのではないか！神武天皇が龔都遊ばされるにしても、その前には先づ國土を平定遊ばされたいし、大化の革新にしても、明治維新にしても、必ずや國土問題の解決が先づ行はれて、そして始めて革新の光が現れ、維新の實が結ばれた事を強記せよ。滿洲國の成立然り、新興支那政府の樹立然り、凡そ、國土問題の解決なくして、歴史の上に光の現れた例はない。而して是れ皆、第二の神代史の發展であり、發展の極、第一の神代史に還つて、其處に國土と火の神とに歸せしめ、以て本然の大創造史の幕を明けんとする天壤無窮運動の聲だつたのだ。國土に還れ！國土は火の神の宮であり、天照皇太神の御身體である。あなかしこく。

信仰の革命

それ故に若しも、天照皇太神だけを戴いて、國土を戴かずにあるやうな日本思想が、猶も依然として持ち續けられるならば、それは國土と御一體の天照皇太神を、國土から引き離して信仰申上げると同じである。こんな道に外れた信仰があらうか！

そんな信仰心から天皇を戴き奉つてゐる事は斷じて日本國民的な戴き方ではない。それこそ外來思想的な戴き方であつて、大忠、大孝の道を失はしめる所以である。これだけの日本人がゐながら、陛下に御苦勞ばかりかけてゐるとは、情けないではないか！

家を建てるにしても土臺が肝腎であるやうに、日本を確りさせるにも亦土臺が肝腎である。即ち國土問題の大解決が肝腎である。

國土奉還といふ開闢以來の一大祭祀問題は茲に生れる。是れ、第二の神代因縁史に有終の成果あらしめて、第一の神代史に、全世界をして復歸せしめるための曠古の大祭祀である。

國土を奉還しさへすれば、歡びに堪えられずして、天照皇太神は善哉々々の御聲を天地一杯に鳴り響かせ給ふのであり、其處に眞、善、美の「本果」は顯れて、地上は太陽の如く輝き亘るのである。因を行ぜざれば果は現れぬ。道を現すにば道を以てせよ！

祭壇は既に靈峰富士が、其處に造營される時の來るのを待つて居り、天照皇太神はその爲めに、日本國土の中央に、太古より富士を現して用意してゐたまふたのである。

見よ！富士は全山、是れ地底から湧いた山であり、國土の魂を、そのまゝに映してゐるで

はないか。日本は、東洋は、世界は、新しく富士から生れるのだ、歴史の終局に富士は立つてゐたのだ！仕組みは太古から、既に完全に整へられてゐた。「天晴れぬれば地明かなり、法華を識るものは世法を得べきか」「富士山の日本」には「侵略」はない。「富士山の日本」には些の私心も、些の権力主義も、些の領土慾もない。あるものは、たゞ、日本國土の魄を以て全世界を、本當に鎮めるといふ偉大なる皇の御親政があるだけだ。即ち「天下が富岳の安きに置かれる」やうになるだけだ。「よろづよの國の鎮めと大空に、仰ぐは富士の高根なりけり」明治天皇も亦、之れを待ち給ふてゐる事が判る。「國主此の法を立てらるれば、富士山に本門寺の戒壇を建立すべきなり、時を待つべきのみ」日蓮聖人は七百年の昔に、既に之れを望ませ給ふた。

速かに富士に祭壇を設けて、國土奉祭といふ未曾有の大典の準備をせなくてはならぬ。

昭和十三年四月八日印刷
昭和十三年四月十日發行

著作者 菅 原 三 郎

東京市牛込區津久戸町二六

發行者 菅 原 三 郎

東京市小石川區江戸川町二番地

印刷者 深 谷 直 之

東京市牛込區津久戸町二六

發行所

皇國日興會

終

5
2

